

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：37409

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520332

研究課題名(和文) 第一次大戦時および戦間期のD・H・ロレンスとポピュラー・フィクションとの相関関係

研究課題名(英文) Correlation of D. H. Lawrence and Popular Fiction During the Time of the First World War and Interwar Period

研究代表者

岩井 学 (Iwai, Gaku)

熊本保健科学大学・保健科学部・准教授

研究者番号：70369859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、D・H・ロレンスを中心とするいわゆるモダニズムのキャンノンとされるテキストと、当時広く読まれながら現在は忘れられたポピュラー・フィクションのテキストとを併置し、両者の相関関係を、19世紀末から戦間期にかけて広く流布したイデオロギーの観点から分析するものである。本研究は、1) モダニズムの作家たちによるテキストを、第一次大戦期のイデオロギーから分析する研究と、2) キャンノンでないとして光の当てられることの少なかったポピュラー・フィクションを、帝国のイデオロギー、ナショナリズム、第一次大戦期のイデオロギーといった観点から読み直す研究の両者を接続しようと試みるものである。

研究成果の概要(英文)：This research intends to disclose the correlation between canonical Modernist texts by such authors as D. H. Lawrence, and popular fiction which was widely read at the time of publication but has long been forgotten. In order to do so, this study attempts to connect two streams of researches: 1) the analysis of the modernist texts in terms of the wartime ideology; 2) re-reading of non-canonical works like popular romance in terms of the wartime ideology, nationalism, the ideology of the empire.

研究分野：D. H. ロレンスを中心とした20世紀英文学

キーワード：D. H. ロレンス ポピュラー・フィクション 第一次大戦 バータ・ラック 炭坑文学

1. 研究開始当初の背景

報告者は、これまで第一次大戦前後に執筆された文学テキスト、また作家により執筆された学校用教科書を主な研究対象とし、これらテキストと大戦をめぐるイデオロギーとの関係を中心に研究してきた。そこから明らかになってきたのは、学校用教科書に関して言えば、R・キプリングによる歴史教科書 (*A School History of England*, C・R・L・フレッチャーとの共著、1911)、G・K・チェスタートンによるイギリス史 (*A Short History of England*, 1917) のように愛国主義に貫かれたものはもちろんであるが、独自の歴史観を描いたD・H・ロレンスの『ヨーロッパ史のうねり』 (*Movements in European History*, 1921) のようなテキストにも、第一次大戦をめぐる様々なイデオロギーが浸透していることである。

さらに報告者は、第一次大戦に関してアンビバレントな感情を抱いていたロレンスの中短編を中心とするテキストをイデオロギーとの関連で分析し、そこに人種退化論、戦争による社会浄化論といった19世紀末から大戦期のイデオロギーを読み取ってきた。

2. 研究の目的

本研究は、上記のこれまでの研究を引き継ぎ、さらに発展させるものである。第一次大戦前後から1920年代後半までに執筆された、ロレンスを中心とするいわゆるモダニズムのキャンノンとされるテキストの分析に加え、当時広く読まれながら現在は忘れられたポピュラー・フィクション、1930年代に隆盛を極めた労働者を扱ったいわゆるプロレタリア文学などのテキストを分析の対象とし、両者の相関関係を、19世紀末から戦間期にかけて広く流布したイデオロギー、すなわち人種退化論、戦争による社会浄化論、帝国をめぐるイデオロギーといった観点から分析することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

モダニズムの作家たちによるテキストを、第一次大戦期のイデオロギーから分析する研究は、ここ約10年の間に大きな成果を上げた。代表的な例を挙げれば、Trudi Tate, *Modernism, History and the First World War* (Manchester: Manchester UP, 1998)、Sarah Cole, *Modernism, Male Friendship, and the First World War* (Cambridge: Cambridge UP, 2003) といったものが挙げられる。

またキャンノンでないとして光の当てられることの少なかったポピュラー・フィクションを、帝国のイデオロギー、ナショナリズム、第一次大戦期のイデオロギーといった観点から読み直す研究も、昨今盛んにおこなわれ

ている。例えば少年向け読み物と帝国のイデオロギーとの分析は、Cecil D. Eby, *The Road to Armageddon: The Martial Spirit in English Popular Literature 1870-1914* (Durham: Duke UP, 1987) に端を発し、また埋もれてきた女性作家たちのテキストと大戦のイデオロギーに関する分析は、Suzanne Raitt and Trudi Tate, ed., *Women's Fiction and the Great War* (Oxford: Clarendon, 1997) などが挙げられる。

本研究は、キャンノンとマイナー作品に関するこれら2つの研究動向を接続し、新たな読みを提示しようとする試みである。

4. 研究成果

ロレンスは第一次大戦時、戦争を煽る指導者たちやそれに加担する作家たち、そして彼らに乗せられる大衆を嫌悪し、コーンウォールの片田舎に身を潜めていた。しかしその一方で彼の戦争観には、戦争が世の中の腐敗を一掃するという、当時支配的な戦争肯定のロジックとシンクロする部分がある。

ロレンスの抱えるこの矛盾が最も顕著に現れているのが「指貫」(“The Thimble”) である。大戦開始の翌一九一五年に執筆されたこの短編は、ロレンスの友人でありこの時期盛んに書簡のやり取りをしていたシンシア・アスキスを主人公ダフネのモデルとしている。社交界の花形であったダフネは、ヘバーン氏の軍服姿に惚れ込み結婚し、その後夫は戦場へと出征する。夫を待ちわびるダフネのもとに帰還したヘバーンは顔面を負傷し、変わり果てた姿となっていたが、ミステリアスなオーラを身にまとう彼は、現世を超越した生の段階へと互いを導いていく。この物語は、戦争によってもたらされた荒廃の後、人々は果たして「復活」することができるのか、といったことをテーマとした作品であり、ロレンスはその可能性を、生まれ変わった帰還兵がその妻を再生へと導こうとする物語を通して模索している。

このようなテーマは、ロレンスが嫌悪していた「感傷趣味」の「金を稼ぐために執筆」された大衆小説には無縁のものである。しかしながら「指貫」を当時流行の小説と比較することで興味深い点が明らかになる。それは、まず一つはこの物語が第一次大戦中に流行したロマンスに対する痛烈な風刺として意図されていたということである。ロレンスはメロドラマの常套的な舞台装置を用い、アンチ・ロマンスとして自らの作品を構想している。そしてもう一つ明らかになる点は、「指貫」はロマンスを風刺していながら、しかしそこには流行のロマンスが流布していたものと同種の戦時イデオロギーが内包されているということである。このことを明らかにするために、「指貫」を、同年に執筆され、同じパターンでプロットが展開されていくバータ・ラック (Berta Ruck) の「腕の中の

幼子」(“The Infant-in Arms”)と比較してみたい。両作品とも、軽薄な女性であった主人公が、戦場から負傷して帰還した男性によって様変わりし、その後二人の新たな関係を築いていくという物語である。この二つの短編を比較することで、ロレンスのテキストにしばしば見られる相矛盾するアンビバレントな要素が露になるのである。

バータ・ラックは多産な作家で、第一次大戦中に量産したラブロマンスで作家としてのキャリアの基礎を築いた。そして長い生涯の間に一五〇冊以上の著作を出版した。「腕の中の幼子」は、一九一五年に出版された彼女の短編小説集『軍服と接吻』(*Khaki and Kisses*)の巻頭を飾る作品である。大戦中に出版された流行のロマンスがそうであるように、「腕の中の幼子」は、名誉や栄光を称誉し、戦時イデオロギーを垂れ流す類のプロパガンダ小説である。いったん軍服に袖を通すと、世間知らずの若者も男らしく魅力的な男性に生まれ変わる。彼の負傷はその務めを立派に果たした証であり、その戦傷ゆえこの帰還兵はなお一層高貴で魅力的な存在となる。女性は一瞬でこの男性に心を奪われ、か弱き乙女となる。このたわいない小品には、あからさまな愛国心や家父長制、そしてステレオタイプなジェンダーの役割といった、戦時メロドラマに必須の要素が惜しみなく盛り込まれている。

ロレンスの「指貫」は、ロマンスの定型パターンを意図的に採用し、戦時メロドラマにお決まりの恋愛沙汰を風刺的に描く。プライドが高く、自分をいかに見せるかに腐心し、自分のスタンダードに達しない世の男性たちを足蹴にしてきた美女が、たくましく男らしい軍人に一目惚れし、従順な女性に生まれ変わる——「指貫」の冒頭に示されたこの筋書きは戦時ロマンスお決まりのパターンである。帰還する夫を待つダフネは、自分が座っていたソファの隙き間の奥に、以前の持ち主のものと思われる指貫が挟まっているのを見つける。この指貫はロマンスの象徴であると同時に、これを見つけ出す行為には発見者の満たされぬ性的欲求が示唆されている。イミテーションと見分けがつかないこの色褪せたアンティークは、それが体現する騎士道精神、忠誠、献身、服従といったロマンスにおいて常に賞賛される美德が時代遅れで幻想に過ぎないことを暗示している。物語の最後でヘバーン氏は指貫を窓の外へ投げ捨てる。これはテキストがロマンスを否認する決定的瞬間であり、ラックの物語に見られたような、傷痕軍人と恋に落ちるといふきらびやかなストーリーが幻想に過ぎないことを暴露する。

このように両作品の対照的性質は明らかである。ラックの作品は、愛国心に掻き立てられたヒロインが負傷した帰還兵と恋に落ちる物語を通し、戦時プロパガンダの拡散に加担する。ロレンスのアンチ・ロマンスは、

メロドラマの語彙や約束事をパロディ化しながらそのプロパガンダの虚飾を剥ぎ取り、愛国の熱狂と相俟った「感傷主義」を葬り去ろうとする。

上記のように相反的關係にあるにもかかわらず、「腕の中の幼子」と「指貫」には共通するパターンがある。それは両テキストが、戦争にはイギリス人とその社会を変革する力があるということを前提としていることである。ラックの第一部ではヒロインから「腕の中の幼子」と呼ばれていた「気取った彫刻家」も、戦争を経験し国家のために自らを犠牲にする「立派な軍人」へと変貌し、彼女の愛を勝ちとる。ラックのテキストは、浄化装置としての第一次大戦という、人々の間に当時流布していた戦争観をいささかも疑っていない。同様にロレンスの「指貫」でも、以前は頼りない若者であったヘバーン氏は、戦場での受難をへて、神秘的なオーラを身にまとった人物として帰還する。彼は第一次大戦の洗礼を受けることで、人々を復活へと至らしむる力を秘めた、典型的なロレンスのヒーロー像へと変貌するのである。すなわち「指貫」も、それが皮肉ろうとするメロドラマ同様、戦時イデオロギーの根幹部分である、戦争による社会浄化論を暗に受け入れているのである。このように「指貫」は、ロレンスのテキストに時として見られるアンビバレンスを示す好例となっている。すなわち同時代に対する仮借なき批判として構築されながら、しかしそこにはそれが批判の矛先を向ける同時代の論理と意識の枠組が透けて見えるのである。

次にロレンスが炭坑夫や労働者階級を描いた短編小説および後期エッセイと、1930年代に「イギリス文化の中で……カルト的地位を占め人気の神秘的崇拝物となった」とされる労働者階級小説、および同じく1930年代に流行を見た中産階級による炭坑夫を題材とした作品を比較してみたい。

まず19世紀以降の炭坑夫による、あるいは炭坑夫を対象とした文学作品の系譜を概観したい。19世紀前半の炭坑労働者による文学的営みは、賛美歌を基にした民間伝承的な唄や詩が中心であった。それらを通して労働者同士の結びつきが強められたと同時に、外の世界に対しては、ある種未開人のように偏見の目で見られていた坑夫たちのイメージを変え、また彼らの厳しい労働環境を認識させる役割を担った。

19世紀後半になり、労働者階級にも教育の機会が広がると、詩が作られるようになっていく。詩が作られた理由は主に二つあり、一つは中産階級において詩が芸術的に最も高く見られていたため、もう一つは小説とは異なり、仕事の合間のすきま時間に創作することができたからである。この時代の炭坑夫詩人としての代表格には、坑夫の息子で、自身も炭坑夫であったジョゼフ・スキプシー

(Joseph Skipsey, 1832-1903) が挙げられる。ただし 19 世紀に労働者階級によって書かれたものは唄や自伝的散文といったものが中心であり、小説と呼べるようなものは 20 世紀まで待たねばならなかった。

一方、19 世紀に中産階級によって描かれた産業小説では、炭鉱は異質な世界としてメイン・プロットの背後に時として顔を覗かせる舞台装置にすぎない。そこでは炭坑夫たちは社会から疎外された異質な存在であり、畏怖とともに好奇のまなざしを向けられる対象として描かれている。

本当の意味での炭鉱文学はゾラ (Émile Zola, 1840-1902) の『ジェルミナル』(Germinal) に始まるとされる。『ジェルミナル』が出版されたのは 1885 年、つまりロレンスが生まれた年であり、ロレンス自身も後に書簡の中でこの作品を読んだと述べている。ゾラ自身はもちろん炭鉱とは縁もゆかりもなく、彼は詳細な現地調査をおこなったうえで、この作品を完成させている。フランスのとある炭鉱街を舞台としたこの作品では、炭坑夫たちと資本家との対立が軸としてストーリーが展開され、劣悪な生活・労働環境の中で力強く生きる坑夫たちが描かれている。しかし同時にそこには炭坑夫たちを異質な他者として描写する中産階級的視点も垣間みられることが指摘されている。

20 世紀に入ると、炭坑夫たち自らが執筆した炭鉱文学が多く産み出されるようになっていく。1910 年代、20 年代のロレンスをへて、1930 年代は、後の 5, 60 年代とともに、労働者階級小説が隆盛を極めた時期である。ロシア革命、世界恐慌をへて資本主義の失敗が明らかになっていったこの時期の作品では、炭坑夫と資本家との対立が大きなテーマとなっていく。これらの作品の中では、炭坑夫サイドからの視点で、自分たちの置かれた劣悪な労働環境や横暴を極める資本家たちが描かれ、体制の変革、転覆が目指される。そのような作品として、ハロルド・ヘスロップ (Harold Heslop, 1898-1983) の *Last Cage Down* (1935), ルイス・ジョーンズ (Lewis Jones, 1897-1939) の *Cwmardy* (1937) などが挙げられる。

また一九三〇年代には、労働者階級作家の台頭と同時に、中産階級出身の作家も炭鉱を舞台にした作品を生み出すようになっていった。中産階級の作家たちは、彼らそして彼らの読者にとって未だ未知の世界であった労働者階級の中に入っていき、自分たちの世界とはほど遠い過酷な環境の中で生きる労働者たちの姿をドキュメンタリーという形で描いていったのである。J・B・プリーストリーはサウサンプトンからバーミンガム、ノッティンガム、マンチェスターを経由しニューカッスルまで旅し、一九三四年に『イングランド紀行』を出版した。経済不況の中で日々の糧を得ようと働く労働者たちが、プリー

トスリーの雑感とともにそこには描かれている。中でも社会の底辺で生きる炭坑夫たちの実態を描いた第一〇章「イーストダラムとティーズ川へ」はこの旅行記の中で最も強烈な印象を残す。この章からインスピレーションを得たジョージ・オーウェルは、北イングランドの炭鉱町で実際に炭坑夫として働き、その体験をもとに、劣悪な労働、居住環境の中で生きる坑夫たちの姿を『ウィガン波止場への道』(一九三七年)で描いた。またこの時期イギリスの映画産業も、工業化の進む現場で働く労働者たちを取り上げたドキュメンタリーを発表していく。このジャンルの映画で最も影響の大きかったものの一つに、一九三五年の『採掘切羽』がある。プロデューサー、ジョン・グリアソンのもと、詩人の W・H・オーデンや作曲家ベンジャミン・ブリテンが集い、アルベルト・カヴァルカンティが監督を務めたこの一二分のフィルムには、地下の切羽で汗を流すウェールズの炭坑夫たちが活写されている。

このような流れを踏まえ、ロレンスのテキストと比較・分析すると、労働者階級出身の作家が炭鉱を描く場合、炭坑夫たちと資本家との対立を主要テーマとして取り上げるのが一般的だが、ロレンスが炭鉱やそこに住む人々を描く場合、『一触即発』や『恋する女たち』といった例外を除いて、そのような対立を描くことは稀である。このためロレンスは、他の労働者作家が描いた階級対立、「階級意識の開花」を描かなかったと左翼批評家から批判の対象ともなった。しかしむしろロレンスのユニークな点は、階級間の軋轢をモレル家という一つの家庭のなかに持ち込んで描いたということにある。「家庭の坑夫」、「女房の仕返し」などの初期短編では、炭坑夫一家の家庭の内部から日常の一こまが活写されたが、『息子と恋人』ではそこに階級間の軋轢と性愛の問題が組み込まれ、一つの作品として昇華をみている。

忘れてならないのは、ロレンスは他のプロレタリア作家たちと異なり、2 つの階級に対する非常にアンビバレントな感情を持ち続けたということ、そしてそれぞれの階級に対する心情が生涯の間に大きく変化していく、ということである。炭鉱や炭坑夫を美化する描写は『息子と恋人』の中にも垣間みることができが、しかしそのメインプロットでは、主人公ポールは父親を始めとする炭坑夫たちの世界になじむことができず、母親が体現する中産階級的価値観を受け入れる。しかしその後それぞれの階級へのロレンスの心情は次第に変化していく。ロレンスは晩年になるにつれ、中産階級に対する批判を加速させ、逆に労働者階級を賛美するようになっていくのである。小説ではメラーズを産み出し、後期エッセイでは盛んに炭坑夫(特に過去の炭坑夫)を賛美し、物質主義への対抗軸として男同士のホモソーシャルな空間を希求するようになる。

ここでポイントとなるのは、労働者を賛美

するロレンスのこの視線は、後の 30 年代の中産階級が労働者階級を見る視線と重なりあう、ということである。炭坑夫の肉体美やホモソーシャルな空間を賛美するロレンスの視線は極めて中産階級的である。すなわち、後期エッセイでは、『息子と恋人』に見られた中産階級への憧憬は捨て去られたかに見えるが、しかしこの時期のテキストには労働者を賛美する中産階級的眼差しが次第に色濃くなっていくのである。このようにロレンスのテキストは、相対立する二つの階級に対する彼のアンビバレントな感情が刻み込まれた重層的なテキストなのであり、そこにはブルジョア階級に対する批難と労働者階級賛美という表層の下に、テキストが生み出された時期に支配的であった中産階級のイデオロギーが通奏低音のようにこだましているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1) 岩井学 (単著)、「ゾラからロレンス、そしてその向こうへ——文学に描かれた炭鉱の系譜」『D. H. ロレンス研究』第 24 号、44-50 頁 (日本ロレンス協会、2014 年)

[学会発表] (計 2 件)

1) 岩井学 (単独) ” Which Class Does Lawrence Belong to?: Lawrence’s Place among Working- and Middle-Class Writers of Mining Novels.” The 13th International D. H. Lawrence Conference (Gargnano, Italy, 2014 年 6 月)

2) 岩井学 (単独) ” Wartime Ideology in ‘The Thimble.’ ” The 2012 International D. H. Lawrence Conference (Arras, France, 2012 年 4 月)

[図書] (計 2 件)

1) 新井英永、浅井雅志編、岩井学ほか著『21 世紀の D・H・ロレンス』国書刊行会、2015 年刊行予定

2) 浅井雅志、石原浩澄、岩井学ほか著『ロレンスの短編を読む』(仮題)、松柏社、2015 年刊行予定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井学 (IWAI, Gaku)

熊本保健科学大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：70369859